

はじめに——新しい時代をみんなで作るための26のかんがえるタネ

10年ほど前から、古典的編集手法である「A to Z」にひかれてきました。人や地域（市区町村から集落・自治会まで）などをテーマに、アルファベットAからZまで26のキーワードをあげ、その魅力を可視化する実験をおこなってきたのです。たとえば「塩見直紀A to Z（本書13ページ参照）」や「ローカルビジネスのこころA to Z」「若者が住みたいまちA to Z」などです。

A to Zというこの編集手法は、素人にも簡単に使え、挑戦するテーマの本質を表現することが可能です（おそらく8〜9割を網羅）。僕はそんなA to Zの魔法にひかれてきました。

思考の整理などにも効果的なこのツールをさらに広めたい。日常使いにしたい。A to Zで扱えるテーマは、自己探求や認知症など、未知のことへの理解を深められるだけでなく、探究学習などの教育分野、そしてまちづくり、ローカルビジネス、地方創生など、ビジネスも含む様々な世界でもっと活用してほしいと思います。キーワードをあげるだけでなく、その内容をさらに深めていけば、本書のように1冊の本にすることも可能です。

本書のめざすところをひとことでいえば、**足元も大事にするし、変革性もあわせもつ**ことです。**僕が半農半Xという生き方**を提唱してきたこの30年、めざしたのはそんな道でした。

いま「人生100年時代」といわれるようになりました。人生はとつても長い。でも、何が起るのかわからないし、思った以上に短いかもしれません。

本書では未来が読めない時代にあつて、それでもここは押さえておけばそう間違えることはない、ボタンを掛け違ふこともない、人生をサバイバルできるし、みんなが周囲にも手を差し伸べることが出来る内容を伝えていけたらと思つています。

人生には遠回りも近道も大事だと思うのです。限られた時間を、遠回りもせず、近道志向・安定志向でもない。足元も大事にするし、冒険も楽しむ。ベーシックだけど、最先端。エッジが立つていながら、地方でほんとうに大事なことをやりながら暮らしている。そんなところをめざしたいと思えます。

本書はそんな**生き方**を**かんがえるタネ**になることを、めざしたいと思えます。

うれしいことに本書は「A to Z マニア」の僕が、「市販される本」というカタチで初めて書くA to Z本です。いままで僕が学んできたことから、これは今後も普遍性があるなと思う

ことを抽出、紹介しつつ、独自の考え方を加えて未来の方向性を提案する、日本の再生を願う本です。

僕がいままで生きてきた中で得た、**これからの生き方のキーワード**をA to Z 26個で洗い出し、星座を描くようにこれからのビジョンを描いていきます。読者のみなさんにも、本書を読んでいただく中で、自身の中に眠るすてきなキーワードを思い出してもらい、それを書きとめていただければと思つています。

そして読んだ後、それをみんなでシェアしあったり、あなた版のA to Zをいつか書いてもらい、「未来の筆者」になつてもらふことも構想し、設計思想としています。

そのツールとして、A to Zの26の各キーワードの終わりには僕からの問いかけ**探究ワーク**を添えています。

• **あなたならどんなキーワードをあげる？**

• **各キーワードにちなんだ問い** など

ペンと紙を用意して、読みながらメモしていただくとうれしいです。想いを文字にしてみることからすべては始まります。

A to Z という 編集手法とは？

「A to Z という編集手法って、どういう方法なの？」「実際の例を知りたい！」「そのよさって何？」など、A to Z にまつわる疑問を紹介します。ここでは A to Z の世界観を見てみましょう。

★ A to Z との出会いの物語

英語の辞書などを除き、A ～ Z のキーワードで編集された本と初めて出会ったのは、1993年の会社員時代。オーストラリアへの出張前に買った『オーストラリア A to Z』（堀武昭、丸善ライブラリー、1993年）でした。アボリジニ、キャプテンクックなどのキーワードが印象的でした。

本を手にしたのは「環境問題」と「天職問題」という、僕が「21世紀の2大問題」と呼ぶ課題と向き合っていたころです。その後、1993～1994年ころに「半農半X（農的暮らしを实践しつつ大好きなこと、ミッションを追求すること）」というコンセプトが生まれ、1999年に勤めていた会社を卒業。京都府綾部市へUターン（帰郷）します。

★ A to Z という重宝なツール

やがて半農半Xを实践し、まちづくりにもかわるようになった2004年ころ、1冊の本との大きな出会いがありました。木村衣有子さんの『京都のこころ A to Z——舞妓さんから喫茶店まで』（ポプラ社、2004年、文庫化は2009年）です。

特にひかれたのが、タイトルに「このこころ」と表現されていたこと。本書でも、その「このこころ」を継承しています（本書の例では「J 地元学のこころ」という項目があります）。

この木村さんの A to Z 本から、僕は3つの A to Z をつくってみました。

- 「半農半Xのこころ A to Z Ⅱ 自由テーマ A to Z」（12ページ参照）
- 「塩見直紀 A to Z Ⅱ 自分 A to Z」（13ページ参照）
- 「綾部のこころ A to Z Ⅱ 地元（小さな市町村）の A to Z」

つくってみて感じたのは、A to Z は自分探しからまちづくりまで、どんなテーマでも可能で、そのテーマを網羅することも深掘りもできる、とても重宝するツールになるということです。

A to Zの世界を感じていただくためにマニアックなA to Zの市販本を紹介します。僕は「A to Z」のタイトルがついた本を集めるのが趣味で、これまでコレクションしてきました。左の写真はその書棚の一部を写したものです。

AtoZ本にはたとえば、こんな本が……

- 『ロンドン AtoZ』(小林章夫 著、丸善ライブラリー、1991年)
- 『ROVAのフレンチカルチャー AtoZ』(小柳帝著、アスペクト、2014年)
- 『ジャマイカ & レゲエ AtoZ』(エフエム東京、1997年、2005年と2010年に増補改訂版)
- 『赤毛のアン AtoZ —— モンゴメリが描いたアンの暮らしと自然』(奥田実紀 著、松成真理子 挿画、東洋書林、2001年)
- 『スヌーピーのひみつ AtoZ』(チャールズ・M・シュルツ、谷川俊太郎ほか 著、とんぼの本、新潮社、2016年)
- 『ゾンビで学ぶ AtoZ —— 来るべき終末を生き抜くために』(ポール・ルイス 著、ケン・ラマグ 絵、伊藤詔子 訳、小鳥遊書房、2019年)
- 『ザ・ビートルズ AtoZ —— アルファベットでたどる音楽世界』(ピーター・アッシャー 著、松田ようこ 訳、シンコーミュージック、2021年)
- 『ロラン・バルトによるロラン・バルト』(ロラン・バルト 著、石川美子 訳、みすず書房、2018年)
- 『ジル・ドゥルーズの「アベセデール」(DVD)』(ジル・ドゥルーズ 出演、國分功一郎 監修、KADOKAWA / 角川学芸出版、2015年)
- 『美を生きるための26章 —— 芸術思想史の試み』(木下長宏 著、みすず書房、2009年)
- 『(兆候)の哲学 —— 思想のモチーフ26』(宇野邦一 著、青土社、2015年)

ほかにも扱われるテーマは猫、旅、文学賞、ロシア、作家の田辺聖子などさまざま。あなたも自分好みのAtoZ本を探してみてください！

僕のAtoZ本

コレクション



「塩見直紀AtoZ (本書バージョン)」

- A** **綾部市**。京都北部の綾部市が故郷です。肌着で有名なグンゼ、大本教、合気道の発祥の地です。
- B** **Book**。初めての著書『半農半Xという生き方』（ソニー・マガジズ、2003年）は台湾、中国、韓国、ベトナムでも翻訳！
- C** **Concept Make**。20代から新概念創出=コンセプトメイクにひかれてきました。
- D** **Deview**。執筆デビュー本は『青年帰農——若者たちの新しい生きかた（現代農業2002年8月増刊）』（農文協）で、2022年は祝20年でした！
- E** **Elementary School**。小学校の同級生は9名。全校生徒60名の小さな学校が学び舎。
- F** **Family**。家族は下関出身の妻（大学の同級生）と社会人の一人娘（農学部出身）です。
- G** **芸大**。50代で京都市立芸術大学大学院での学びにチャレンジ。いままでやってきたことにアートを加え、新たなものを生み出したい！
- H** **ハマっている**ことは、日に4度、潮の流れを変える関門海峡の潮流観察。
- I** **Inspire**。自分をずっと鼓舞=インスパイアしていきたい！
- J** **Journey**。新しい旅「天職観光」も提唱中！
- K** **子ども時代**はファールルにあこがれた昆虫少年。ソフトボールも大好きでした。
- L** **Laboratory**。1人1研究所を提唱。僕は2000年に半農半X研究所を始動！
- M** **めざす**ところは、ことばで世界をデザイン！
- N** **農**。実家は米や茶などをつくる兼業農家で、農に親しんできて、田畑や野山は感性を育む遊び場！
- O** **Overseas**。行ってみたい海外=イギリスの古書の街ヘイ・オン・ワイ、ロシアのダーチャ、農業をしながら絵を描くフランスの村バルビゾン、バリ島。
- P** **Photography**。中学時代よりカメラにはまり、高校は写真部。自宅で白黒の現像やプリントも。
- Q** **Quest**。今、関心を持っていることは、シンガーソングライターの作品は何歳代がヒット曲が多いのか？ 20～30代の時の作品？
- R** **Respect**。リスペクトするのは哲学者の内山節さん、思想家の宇根豊さん。
- S** **仕事**。半農半Xを伝えることやX系のワークショップが仕事、ミッション。
- T** **食べ物**。好きな食べ物は蕎麦とサラダ！
- U** **歌**。好きな歌は加藤登紀子さんの「Revolution」。
- V** **Village**。故郷の旧小学校区は、信号がない村！
- W** **Word**。古今東西の名言を持ち寄り学ぶ「未来のことば大学」をみなさんとできたら！
- X** **X-Photo**。飛行機雲でも建築でも何でもXに見えてしまい、エクスポフトを撮っています。目標1万枚。いつか写真展を！ インスタで公開中！
- Y** **夢**。3年に1度、新潟で開催の「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」で自作品の出品！
- Z** **ずっと**続けたいことは、他者に学びつつ、独自のものを創造し続けること。

「半農半XのここAtoZ (本書バージョン)」

- A** **And**。半農半Xとは、「農か天職か」ではなく、「農も天職も」という「ANDの発想」です。
- B** **Base**。農、持続可能性、季節、自然という「ベース（基盤）、分母」を大事にします。
- C** **Calling**。Xとは天職。内なる声や呼びかけに耳を傾けます。
- D** **どこでも**。場所は都会でも田舎でもどこでもOK。暮らすまちや村を深掘りし、大好きになっていくイメージです。
- E** **Energy Charge**。農的な時間からエネルギーチャージ！
- F** **Future Generations**。将来世代につけまわすのではなく、生き方の贈り物を！
- G** **ギフト、ギブ**の精神が大事！「獲得」より「与える」がキーワードです。
- H** **広さ**。畑や田んぼの面積、広さは関係なく、ペランダでも家庭菜園でもOK！
- I** **Inspiration**。自然からのインスピレーションをXに、Xからの気づきを農に活かすなど、善循環が理想！
- J** **時間**。農の時間は朝だけでも、週末だけでもOK。リモートワークで「昼休み農」もいいですね。
- K** **家族**で農作業や家族のXを活かしていけたら最高です。
- L** **Long**。長く続けたことはX（天職）のヒントかも。
- M** **Mission**。人も他の生命もみんな、独自のX=ミッション（使命）を持っています。
- N** **農**はとつてもクリエイティブ。感性を磨くのに役立ちます。
- O** **Open Heart**。心も身体もリラックス、オープンハートで。
- P** **Peace**。万象との平和を希求するライフスタイルです。
- Q** **Quality of Life**。QOLもきっとアップします！
- R** **Respect**。先人の知恵をリスペクト！ 学べること、いっぱいです。
- S** **Sustainability**。サステナビリティ（持続可能性）を大事に。
- T** **得意なこと、大好きなことを**社会に、未来に活かしていきましょう。
- U** **運氣**。自然の暮らしで、きっと運氣もあがっていくはず！
- V** **Volunteer**。ボランティアがXでもOK！ できることをしていくこと！
- W** **Work**。理想は職住一体で3世代居住かな。
- X** **X meets X**。それぞれのXを掛け合わせ、魅力ある社会に。X meets Xです！
- Y** **野菜**。まずはネギやサツマイモなどの身近な野菜だけでもOK！ 好きな野菜を育てていきましょう。
- Z** **ずっと**。この地球がずっと続いていきますように。

AtoZで半農半Xと
自分を紹介する

古典的編集手法AtoZを知っていただくために、僕が提唱する「半農半X」というコンセプトと僕自身について、AtoZで自己紹介をしてみます。



本書はA to Zの26のキーワードで、見えにくくなったこれからの生き方についての新しい思想を、新しい方向性を、新しい星座を描くものです。最新のものを使わなくても、これまで「あるもの」を使って、新しい思想や方向性はつくれる。そんな試みをこの本でできたらと思います。

めざすところは、みんなが「大地」「食農」「足元」を大事にしながら幸せになるには「みんながX（使命）を発揮する社会にするには」です。A to Zは荒削りでありながら、本質を外さず、核心部分をしっかり意識しつつ、余白も持ち、遊び心を注入できる表現手法です。A to Zで僕なりの豊かな思想を提案したいと思います。

こうして、本書を手にとってくださっているあなたと「出会う」こともとっても不思議です。僕の場合だと、「半農半X」ということばを生み出していなければ、みなさんと出会うことはなかったのです。

大学で90分授業をする時、毎回、冒頭にこんなことを黒板に書いてきました。「これまでのあなたの人生×この90分授業！！（新しい気づきを、ひらめきを）」。みなさんのこれまでの人生と本書が出会うことで、何かが生まれたいと思います。

これは僕の人生において、初のA to Z本です。その記念すべき最初のキーワードは【A間柄】です。

もう20年ほど前のことです。日本の古いことばでいいことばはないかと古語辞典を



めくっていたら、「在り合ふ」ということばと出会いしました。「在り」は存在を意味し、「合ふ」は出会いをあらわすことばです。道でぼったり知人と出会ったり、道を横切る蝶々に出会ったり、立ち寄った道の駅で誰かが丹精をこめて育てた野菜を買ったり。それぞれ別々に生まれてきたものが、ある時、偶然か、因縁か、出会う不思議。人生がクロスする。「在り合ふ」って、とても美しいことばだと思います。

一番美しい漢字は「合」という字だと書いておられた方がいて、なるほどと思ったことがあります。漢字の「合」という字そのものは、あまり美しさは感じられないのですが、「助け合う」「意見を述べ合う」「交換し合う」の「合う」と考えれば、たしかにそうかもしれません。「合（あう）」が減りゆく時代に、取り戻すべきは「合う」なのだと思います。

でもいま、この人生がクロスする「縁（えん、ゆかり）」があやうい世になっているのです。いまという時代を生き

る僕たちを何かにたとえるなら、海に漂う小舟と似ているように感じます。海は大荒れ、空には黒い雲が立ち込め、進むべき道を示す北極星も、灯台の灯りも見えませんが、本来、舟にあるはずの羅針盤が壊れていたり、海に落としてしまっていたり。そもそも羅針盤を備えていなかったりするのもかもしれません。

日本も、世界も、そんな状態にいるように思えてなりません。そんな時代をどう生きたらいいのか。僕はロシアの文豪レフ・トルストイが遺した以下の物語が、方向性を示唆してくれるのではないかと思ってきました。

ある国の皇帝が3つの質問の答えを探していました。「いちばん大事な時間はいつか?」「この世でいちばん大事な人は誰か?」「いま何をなすべきか?」というものです。世界中の賢者に尋ねてもわからなかった皇帝はがっかりして散歩に出ました。その時、井戸の水を汲む少女に出会います。皇帝は3つの問いを質問してみました。それはこう答えました。「いちばん大事な時間は、いまこの時。いちばん大事な人は、いま自分の横にいる人。いまなすべきことは、自分の横にいる人に善行をおこなうこと」と。皇帝は喜び、少女が持っていた重い井戸水を代わりに運びました。自分の横にいる娘に善いことをしたいと心から思ったために。

以前の僕なら、「この世で一番大事な人は？」と問われたら、「家族」と答えていたと思うのですが、この物語を知って以来、「目の前の人」と答えたいと思うようになりました。

講演をしたり、ワークショップをしたりする時は、当然その方々を。

本書で言えば、いま手に取ってくださいているあなたを。

新幹線に乗ったなら、隣の席の見ず知らずの方を。

農作業をしているとしたら、お隣の畑にいらっしゃるおじいさんや、畑のミミズやカエルを。

目の前の人に、この対人観で接することができたらと思うのです。

この3つの質問への答えをみんなが見つけ、行動を重ねていったら、すてきな世界に変わっていきそうです。

A to Zを使ってアイデア出しをしたり、本を書いたりする時は、まず脳内検索、思いつく限りのキーワードを出していきます。今回の本を書く時、「間柄」「在り合ふ」のほかに、関連することばとして出てきたのが「関係性」ということばでした。

僕は「半農半Xという生き方【X⇨多様なX（使命多様性）】」をこの約30年、提唱してきましたが、半農半Xとは言ってみれば「関係性の回復」のことだと思っています。本書をお読みななる方は、自分のことが嫌いな方は少ないかもしれませんが。半農半Xとは「自分自身との関係性の回復」でもあります。でもいまはなかなかそれがで

きなくなっているのかもしれませんが。

自分の次はもちろん「他者との関係性の回復」も重要です。そして「社会との関係性の回復」も。「自然との関係性の回復」も急務だし、「過去世代や将来世代との関係性の回復」も。だけどもはすべてが分断される世になってしまっています。

僕は「関係性」ということばに関心を持つようになってから、いろいろ関係することばをメモするようになりました。たとえば「関係の断絶」「関係性の貧困」「関係性の固定化」「関係性の創造」などです。アートの世界だと、フランスのキュレーターのニコラ・ブリオが1998年に刊行した著作『**関係性の美学**（原題『L'esthétique relationnelle』、本邦未訳）』が有名です。

関係性があります課題になる中、どうすればそれを変えていけるのか。僕は自分の役割に気づくこと。いまを生きていることの不思議さに気づくこと。そして他者のキーワードや他者のXに関心を持つことだと思ってきました。

詩人の吉野弘さんの作品に「生命は」という名詩があります。詩は、こんなことばから始まります。「生命は／自分自身だけでは完結できないように／つくられているらしい」と。花、おしべ、めしべ、風、虫などの視点で関係性を書く吉野弘さんは、詩をこう締めくくっています。「私も あるとき／誰かのための虻あぶだったろう／あなたもあるとき／私のための風だったかもしれない」(詩集『風が吹くと』サンリオ、1977

① ブリオのこの本は日本語訳がまだないので、関心のある方は、『現代アートとは何か』(小崎哲哉 河出書房新社、2018年)がおすすすめ。(塩見)



A

年 / 『吉野弘詩集』 角川春樹事務所、2022年。

こんな視点で生きられたら、他者が違って見えてきますね。

徳川將軍家の劍術指南役だった柳生家家訓もすてきで、これからの方向性を教えてくれます。「小才は、縁に会って縁に気づかず。中才は、縁に気づいて縁を生かさず。大才は、袖振り合う縁をも生かさず」。

縁（えん、ゆかり）について、僕はすごくもったいないことをしているのかもしれない。思い切って手紙やメールを書いてみる、話しかける、会いに行ってみる。今後の人生には「橋を架けること（関係性の回復や創造）」が重要なのです。

- ★あなたならキーワードAを何にする？（例：愛など）
- ★「関係性の回復・創造」であなたが試みてみたいことは？

●人物
小崎哲哉
ニコラ・プリオー
吉野弘
レフ・トルストイ

●関連キーワード
【X=多様なX(使命多様性)& X meets X】
p.170

|A|B|C|D|E|F|G|H|I|J|K|L|M|N|O|P|Q|R|S|T|U|V|W|X|Y|Z|